

岡垣の炭鉱②

―大正期の炭鉱―

明治末期に岡垣で操業していた炭鉱は、戸切にあった第二川島炭鉱、海老津炭鉱、柳谷炭鉱と野間にあった野間炭鉱の4炭鉱のみであった。

大正期における岡垣の炭鉱は、1914(大正3)年に始まった第一次世界大戦による戦争景気により石炭の需要が増加したことから次々と開鉱された。しかし、1918(大正7)年の世界大戦終了と1920(大正9)年の株価大暴落により炭鉱不況が起り、これが昭和の初め頃まで続いた。

【大正期の岡垣の主要炭鉱】

●海老津炭鉱(戸切字百合野)

1911(明治44)年から採炭を始めている。大正時代になって、鉱区の合併などで出炭量も増加した。

1917(大正6)年に、芦屋町出身で衆議院議員も務めた吉田磯

岡垣歴史文化研究会 石田 健次

吉が鉱業権者となり海老津炭鉱株式会社とした。坑口は4坑で、従業員は1200人以上であった。

石炭の運搬は、無端軌道(エンドレス)を海老津駅まで敷設して、駅では直接炭車に積み込む方法を採用するなど設備の機械化を進めて採炭能力の増進を図った。

採掘された石炭は高品質であったことにより、国から重要炭鉱の指定を受けており、大正期の岡垣では主要な炭鉱であった。

●柳谷炭鉱(戸切字解原)

1906(明治39)年6月の開鉱であったが同年9月には休止している。大正に入って本格的に開鉱された。

1917(大正6)年に、後に出光興産を創業した出光佐三が買収したが、その後鉱業権者は代わっている。

大正の中頃が最盛期で、1925(大正14)年に休業している。石炭の搬出は、海老津駅まで山越えの馬橋道を敷設し、馬に炭車を引かせて運んでいた。

1920(大正9)年頃に坑口巻揚機用の蒸気汽缶を設置した。

●白谷炭鉱(戸切字白谷)

1902(明治35)年から5年間操業した後、1914(大正3)年になって操業を再開している。しかし、この後、鉱業権者は何人も代わっている。

1924(大正13)年に炭鉱名を「蔵王炭鉱」に変更して、翌年まで採炭した記録が残っているが、その後の詳細は不明である。

●高陽炭鉱(山田字恋ノ田)

1918(大正7)年から3年間の操業であった。

1920(大正9)年には、3万3658トンの最大の出炭量を記録したが、同年、経営不振により休鉱となっている。

●徳満炭鉱(戸切字岸元)

1919(大正8)年から4年間の短期間の操業であった。炭鉱名の由来は、岸元にあった牛の守護神を祀る祠の徳満様から名付けたと言われている。石炭の搬出は、炭箱を連結して馬に引かせて海老



▲海老津炭鉱開坑記念の灯籠(龍神社・戸切区)

津駅まで運んでいたようである。

その他、大正期に操業した炭鉱には、野間炭鉱(野間)、第2川島炭鉱(戸切)、茅原炭鉱(野間)などがあった。

大正期に操業していた炭鉱の中で、昭和に入っても操業を続けることが出来た炭鉱は、海老津炭鉱、野間炭鉱と1938(昭和13)年に操業を再開した高陽炭鉱の3炭鉱のみであった。

つづく